

上根来の伝説と 堂本の民俗など

——民俗調査報告拾遺——

永 江 秀 雄

福井県教育委員会から昭和三十九年度民俗資料緊急調査員を命ぜられ、微力の私が小浜市上根来(かみねごり)と遠敷郡名田庄村堂本(どうもと)の民俗調査に当たった。その結果は取纏めて県教育委員会から刊行されるが、ここでは紙面が限られて充分な発表ができないので、その補遺の意味を兼ねて、私が特に広くお伝えしたいと思う事柄を、ここに報告させて頂きたい。

A 上根来の伝説・その他(主として、当地の最古老である前田八十八翁八四才夫妻の御教示による)

(1) 大明神 太古、若狭彦大神が兄神と共に、近江国の方から上根来との境の山を踏み分けてやつて来られた(この神々は海幸彦山幸彦として有名。即ち若狭彦大神は彦火火出見尊、兄神は火照命である)。所が、兄神が山の頂上の「大明神」と今も呼ばれる岩の上で昼寝をしておられる間に、

弟神は兄神に先んじて遠敷の地に至りこの地を占めてここに鎮坐された。これを見た兄神は大急ぎでゴザ(莫塵)を敷いて山をすべり降りて来られたが、それ以来、兄弟二神は不仲になつてしまわれた。なお、大明神の西側にゴザ岩といわれる大岩があるが、そのときの名残りを留めるものであるといひ(御座をされた岩との説もある)、また、大明神の南に馬ツナギバと呼ばれる場所があるのは、兄神が乗馬をつないでおかれた所だともいふ。そして、そのときに兄神は宮川村(現、小浜市)の加茂に鎮坐されることとなつたが、後世まで遠敷と加茂の村人達も相容れず近年まで婚姻もできなかったといわれる。

(2) 不動さま 紀州のネゴロから不動明王がこの地に来られ、最初は上根来と中ノ畑の間から北東に入るネゴリ谷へ見えた。しかし、そこが気に入らないため、上根来の坂尻の奥にある通称ヒラダニに来て鎮坐された。今も石の祠に祀りされているが、ここには不動の杜とか不動の滝もあり、昔から早魃に際してはこの不動さんに雨乞いのお祈りがされた。(筆者補注)この根来はその昔、徳川家康が通過したことがあると

もいわれ、この地名と家康の鉄砲百人組の一つである「根来組」との関係は推測する向きもある様子である。しかし、この不動さまの伝説が示すように、もつと古く和歌山県那賀郡根来村の新義真言宗大本山「根来山大伝法院」(根来寺ともいふ)との関係を探ることの方が肝要かも知れない。また、この地名が明確にネゴリと呼ばれることは、根来寺や根来組のネゴロとその起源が全く別であることを示しているものかも知れない。

(3) ボンガ屋敷 滋賀県境の山上に、ボンガ屋敷またはボンノ屋敷と呼ばれる寺院跡があり、クズガネ(葛の根)掘りを行なつたときなどに土器の破片が出ている。そして、これは織田信長に攻め亡ぼされたものらしいとの言い伝えがあり、天台宗の寺院であつたようだともいわれる。また、釣谷と呼ばれる別の山間にもボンガヤシキという平地があり、これも寺跡といわれている。なお、上根来の坂尻地区にはジョウド寺という寺院があつたが、今はその跡だけが残っている。因みに、この坂尻とは、上根来の南端すなわち最も滋賀県寄りである小聚落で、現在は民家が三戸あるため俗に

永江 上根来の伝説と堂本の民俗など

三軒屋とも呼ばれているが、昔は記憶されているだけでも七戸が所在しており、更に古くはもつと大きな村落であつたかも知れないと考えられる。

(4) 平家の落武者 上根来の坂尻地籍は古くは平家の落武者が住んでいた所といわれるが、坂尻の南東の山麓に明治末年に新田開発のため畑を掘つたところ、地下五尺ぐらゐの所に、石囲いをして中で火をたいた跡が幾箇所も並んで出たし、大きな墓石も現れ、尺余の刀が発掘された(前田翁確認)。(補注)これらの住居などは誰のものであつたのか不明であるが、平家の落武者に關係あるものではないかとの推測もなされて来た様子である。正鶴を得るためには歴史学者古学の調査を併せ行わねばなるまいが、恐らく上古の遺跡ではなからうかと想像される。

(5) 安倍晴明の池 上根坂尻の旧家である前田安左エ門家(前田八十八翁宅)の邸内にある池は、むかし安倍晴明が来て掘られたもので、これを大事にしていたら火災は起らぬといわれた。その言に従つて坂尻には昔から火事がない。

(6) ミヨウアン水 上根来から近江の針

畑(滋賀県高島郡朽木村)へ越える峠道は昔はこの地方の最も重要な交通路の一つであつたが、今もその頂上近くの路傍に一体の地藏尊が祀られ、その前に池と呼ばれる井戸がある。これは或る時にミヨウアン和尚という偉い坊さんが来て、旅人達のために掘られたものである。そのとき、ミヨウアン和尚は井戸に蓋をして、水が充分に溜るまで蓋を取つてはならぬと言われたが、誰か(一説に、上根来の和尚)が早く中を見たさに蓋を取つたため、その時の水位までしか水が溜らぬ井戸となつてしまつた。しかし、その後ここに釣瓶を降して水を汲み、旅人や荷持ちの人々が喉を潤すことができた。今いて、この水をミヨウアン水と呼んで尊んでいる。(補注)このミヨウアン和尚とは国富村(現、小浜市)の奈胡か羽賀の住僧であつたらしい、という当地の西本平治郎氏の教示をヒントに、ミヨウアン和尚について調べてみたところ、国富村太良庄の長英寺中興開山の明庵禪師であることがわかつた。禪師は、天和二年に三方郡南前川村野々間の山竹五郎助家に誕生、七才のとき向陽寺の点外愚中禪師につき得

度、修行を重ね後には小浜空印寺の住職(十六世)となり藩主酒井忠用の帰依が深かつた。延享二年七月、太良庄長英寺の火災に遭うや即時空印寺を辭し、長英寺の復興に努め三年後にめでたく落慶。明和五年、八十七才にて同寺で遷化された。真筆や絵像、記録が大徳としての行跡と共に今も伝え残されている。なお、近く長英寺から明庵禪師の伝記が出版される由である。

(7) モチツキ場 古くは京街道とも称され若狭近江間の主要道路の通じたここ上根来は、恰も宿場のような地位を占めていたが、江州への峠道の麓に、今もモチツキバと呼ばれる場所がある。ここは往時、旅行く人々に餅をついて売る店があつた所といわれ、そこに一人の美しい娘がいたことを伝える「おタネ見たさに釣谷見れば、おタネ隠しの霧がこむ」という俗謡が残されている。なお、釣谷と呼ばれる山間の一隅にあるモチツキ場(跡)は、現在の道筋とは離れているが、古くはここを通り峠を越えて針畑方面へ出たものと考えられている。その他、下根来鶴ノ瀬の「お水送り」等に関連する伝説についても報告すべきであるが、調査が不十分であるので後日を期し

たい。

B 堂本の民俗行事・伝説など(主として、当区の湯上新兵衛翁七一才の御教示による)

(1) 正月ッアン 堂本では大正十年ごろまで、新年を迎えると正月ッアンまたは正月ッアンというものを祭つた。これは座敷の戸か壁の際にムシロを敷いて米一俵を置き、その上方にチョウモンから三尺ぐらゐの横木を吊して稻七把をかけ、更にその中央からクルゲというものを米俵の上に来るように吊り上げたものである。この米俵には白米四斗二升を入れ、俵の両端上部には向つて右にワカバ(ユズリハ)左には女松(いづれも三枝と、松はマツカサを有するものを選んで)を立てる。また、このクルゲとは麻の才を積む桶のことであるが、その中には白米を八分目ほど入れ、白米の上には鏡餅一重ねとミカン・串柿・昆布が載せられる。こうしてクルゲは棧俵で蓋をし、その上を荒縄で十文字にくくり、その端を以て上の稻木に吊すわけである。なお、クルゲには半紙の上端のみを残して一寸巾ぐらゐに切り込みを入れたマエカケを、コヨリでゆわえつける。

永江 上根来の伝説と堂本の民俗など

次に、稻をかけた横木の両端には、アラマキといつてワラツトに塩サバ一匹とジャコ一匹ずつを入れたものをつつ吊し、なお、各端にモチバナをもかける。モチバナはワラに小さい餅五箇ずつをつけ、更にこの幾本かを大きなカサモチで束にしたものであるが、この正月ッアンには十二本(閏年には十三本)を束にしたものが用いられる。これは神棚や床の間用のモチバナが五本か七本のものであるに對して、最も豪華である。また、この正月ッアンの前方にはムシロの上に、川原から拾つて来た平たい石を置き、それに二重カワラケを載せてお灯明を献ずるが、これもまた神棚その他には一重カワラケを用いたことから考へても、正月ッアンが如何に鄭重に祭られたかがわかる。

かくて正月十一日になるとツクリゾメが行われるが、ここでは、新年の明き方の畑地に、この正月ッアンのワカバと松を立て、その中央正面にクルゲを据えてこれを祭り、鍬で数回その前の地面を打つてツクリゾメとした。なお、正月ッアンのアラマキの塩サバとモチバナの餅は大切に保存され、サバは三月下旬ごろの麻種播きの日に

焼いて食べ、モチバナの餅は正月オワリと呼ばれる六月一日に煎つたりなどして食べて祝うこととされていた。

(2) マツアゲ うら盆の日、即ち七月二十四日には愛宕講があるが、その前日から京都の愛宕神社へ代参していた二人の当番がお昼ごろに帰村すると、代参者は直ちにお寺(曹洞宗、見性寺)の下を流れる堂本川で全身を清め(これをオカワという)、そのまゝ家に帰らず寺に上つて出迎への講員一同と挨拶を交わす。その後、お寺で(以前は、村中が上下二組に分かれそれぞれ当番の家で)お講が行われる。所で、この夜、見性寺の近くの仁吾谷口の広場でマツアゲという特殊な民俗行事が催される。

このマツアゲとは、トロギと呼ばれる全長二十メートルもある二段式の杉の柱の頂上に、麻木と竹で作つたモウジといわれる大きな漏斗状のものをつけ、その中に麻木・ワラ・カヤ等を入れておき、あとで参詣者がタイマツ(肥松のジンを用いる)に火をつけてこのモウジに投げ入れ、これを燃やすものである。しかも、その火種は、堂本から丹波へ通じる知井坂の登り口に祀られる愛宕社(小祠)の御神灯から移される

ものであつて、このマツアゲは正に聖火の祭典といふことができる。そして、これは愛宕神社に献ぜられるものともいい、仏の供養のために行うものという人もある。また、このマツアゲの場所へは女性や忌みのある家の男、更に他所者も一切立ち入ることを許さず、寺の境内から拜観させるのみという戒律が厳守されている。なお、このマツアゲは同夜、同じく名田庄村の楨谷・染ヶ谷・三重・下・虫鹿野・出合・木谷などでも行われる。(補注)西角井正慶博士編『年中行事辞典』には「愛宕火」の項に、この地に隣接する京都府北桑田郡でも「七月二十四日に長さ十二間もある木の先に麻がらで大きな茶釜形の火打を作り、中に枯竹・松枝・麻稗をつめ、これを河原に立て、下から炬火を投げ上げて燃す」行事のあることが紹介されている。なお、新村出博士編『広辞苑』には「あげまつ」||揚松の語を挙げ、盆の行事として「柱の頂上に籠をつけ、これに藁や匏屑などを入れ、下から小松明を投げ上げて火を点じる」もので、「柱松」「火上」「投炬火」ともいうことが説かれている。

(3) 文七踊り うら盆の夜、マツアゲの

終つた後に見性寺の境内で必ず盆踊りが行われる。これは名田庄特有のもので「文七踊り」といわれ、シヨロリクドキという音頭に合わせて踊る。名田庄の中でも下(しも)部落の茹田比咩神社で踊られる文七踊りが、昔からの伝統を最もよく保持しているといわれ、昭和三十七年五月十五日付で福井県の無形文化財に指定された。しかし、堂本の人達は、この踊りと音頭は丹波から伝わつたものであり、それを最初に受け入れたのは堂本であつたと今も自任している。(補注)文七踊りについては、福井県教育委員会編『文化財調査報告』第十四集に斎藤楓堂氏が詳述しておられるので、以て学ばれたい。

(4) 豪農藤本弥助 堂本の南端から丹波の知井村(現、美山町)知見へ越える知井坂(普通、チザカと呼ぶ)が通じているが、昔その麓に藤本弥助という豪農が住んでいた。その邸宅は城かともがうばかり豪壮なものであり、同氏の一建立による見性寺には今も立派なお墓が残っている。この藤本氏は他の地方から移り来たものといわれ、五十年余り前まで存続していたが、既に血統は絶えて今では広い邸跡と他人に

よつて家名のみが伝えられている。なお、藤本弥助は堂本一帯の田地の殆んどすべてを占有していたといわれ、田の出来や仕事ぶりを馬に乗つて見廻るのが常であつた。所が或る時、堂本川の近くのイモネ山麓にある温泉で、馬の脚を洗おうとしてそこへ馬を引き入れたため、温泉の湯が止まつてしまつたともいわれている。因みに、この附近には今も湯上河原という地名が残つている。

(5) 宝珠院 昔、堂本のシモジヨウと呼ばれる所に森次郎三郎という一人の侍が住んでいたが、その一建立によつて宝珠院という寺が造られた。この次郎三郎は、カミシヨウの藤本弥助と並んで、堂本部落の草分けと想定されている人である。そのお墓は邸の近くにあつたが、五輪塔などは数十年前にお寺へ移された。また、森氏の祀つたという稲荷の小祠がその邸跡にあり、今も森次郎三郎の家臣の末裔という湯上新兵衛家によつて祭られている。なお、この湯上家の七代前の先祖(天明五年歿)が、堂本の小村で見性・宝珠の二寺院を持つことは経済上無理であるとの理由から、宝珠院の檀家もみな見性寺につくことを提案され

一同も喜んで実行に移したといわれる。思うに、当時(天明二年—七年)は、いわゆる天明の大飢饉に襲われたときであり、檀中の合併も定めしこのことに関係するものであつたらう。従つて堂本では全戸が見性寺の檀家であり、一方、堂本区の集会はこの宝珠院で行われて来たという。しかし、最近ではこの宝珠院をトタン葺きの小堂とし、御本尊の子安地藏を祀るのみとなつて

ばれる少しばかりの平地があり、大きな石が幾百箇も集まつている。これは昔、山賊が棲んでいた所で、この石は捕手が来たときこれを捲くり落して撃退するために集めていたものであるという。
以上を以て、小浜市上根来と名田庄村堂本の民俗資料緊急調査報告の補足とさせて頂く。

(6) 弘法屋敷 堂本川の支流である仁吾谷川を遡ること二十六町ばかりの所に足谷^{アジノ}という山があるが、その足谷山の頂上近くに弘法屋敷と呼ばれる場所がある。昔、弘法大師がここに邸を開こうとして登られたといわれ、そこには今もそのコメ石といわれる大きな石が残つているという。所が、弘法大師は百谷のある所でなければ邸は開かぬといわれたが、この仁吾谷には九十九谷しかないという人があつたので、遂にここに邸を開くことを中止し、高野山へ行きそこに邸(道場)を開かれたのである、と言ひ伝えられている。

(7) ヌスト屋敷 仁吾谷の川口から七、八町入つた山腹に、ヌスト屋敷と呼